

## 宇佐美幸彦先生ご退職に寄せて

佐藤 裕子

冒頭から私事で恐縮であるが、宇佐美先生は私が当時の関西大学文学部独文学科で初めて専門科目としてのドイツ語を教わった先生である。ドイツ文学科は当時学生数60名を超す、現在からみれば随分と大所帯の学科であり、先生方は17、8人おられたと記憶している。学生は名簿順に2つのクラスに分けられていて、「専門ドイツ語」の授業が2クラスあり、その一つを宇佐美先生が担当されていたのである。宇佐美先生は、おそらくまだ30代前半であられたと思う。30代初めと言えはまだ青年と言ってもいいくらいであるが、先生にはすでにアカデミックかつミステリアスな雰囲気が漂っており、私たちは、この人はひょっとして日本人の名前を持ったドイツ人なのではないか、いや、日本人でもドイツ文学を長年研究するとドイツ人のようになるのではないか、などと勝手な想像を巡らせていた。

宇佐美先生はその後忽然と大学から姿を消されるのであるが、ドイツ、当時の東ドイツのライプツィヒ大学に研究に行かれたというのである。それを伝え聞いた私たち学生は、あたかも宇宙飛行士が月に行くような、そんな現実離れした羨望を覚えたのだった。とはいえ、独文の学生でありながら、実際のところ、ドイツはおろか海外へ出たこともない私たちはライプツィヒがどこにあるのかも知らなかったのである。

宇佐美先生はライプツィヒ大学で博士号を取られて帰国されるが、それも当時は先駆的なことであり、私たちはそれを知ってまたもや驚き、畏怖と尊敬を持って、キャンパスを颯爽と歩く先生を仰ぎ見たのである。時代は1980年代、携帯もノートパソコンもまだこの世に存在せず、学生たちは試験のたびに死に物狂いで勉強し、あるいは友のノートを写し、教授の一言一言に震え上がっていた頃のことである。

時は流れ、私は母校で教員として働くようになったが、職場はほとんどが学生時代に教わった先生方という有難くも怖い環境であった。当

時宇佐美先生は学部執行部や全学の重要な役職を次々に務められ、ほとんど学科に戻って来る時間がないほどの忙しさであったと思われるが、そのような状況でハイン、フォルスター、グロツスやグダイズムに関する研究や翻訳、著書など、学術的な業績を着実に積み重ねられていった。その成果が独文学会でも高い評価を得ていることは周知の事実である。教室や学部、全学の役職や次々に任される委員会、学会の仕事をこなしながら、研究者としてモチベーションを保ちつつ学問的に納得のいく仕事をするには至難の業である。たいていはどちらかに重心を置かざるを得ない。私は宇佐美先生が、仕事を依頼されて断ったのを聞いたことがない。いったいどのようにして時間とエネルギーをやりくりしているのだろう、超人的としか言いようがないと思っていたが、ご本人から母校の大阪外国語大学のラグビー部の監督まで務められていたことがあると聞いて、さらに仰天した。

教室内での会議では、学部執行部から降りてくる様々な課題に関して皆の意見が出た後で、私たちの盲点を突いた考えや様々な具体的な知識やアイデアが、まるで賢者の声のように宇佐美先生から出てくる。その賢者の声は時には理念的であり、時には現実主義的かつ実質的である。いずれの場合もそれらのご見解は私にとって大変な勉強になったことは言うまでもない。

宇佐美先生は昨年、ドイツの19世紀から20世紀初頭にかけての一枚絵ビルダーボーゲンに関する研究書を出版された。総ページ数780ページにわたるビルダーボーゲンの百科全書のような大著である。そこには単に絵画の解説のみならず、ドイツ文学や文化史に関する先生の見識が散りばめられていて、まさに宇佐美先生の現在までのご研究の集大成ともいえる著作である。おまけに巻末には、所蔵や製作年を記した123ページにわたる作品の一覧表まで添えられていて、ドイツの大衆文化を研究する者にとっては間違いなく貴重な資料となっている。かつて宇佐美先生は、学生が大学での勉強の終わりに卒業論文を書くように、ご自分も研究者としての印を残したいというようなことを言っておられたが、今回書かれた研究書は確かにその言葉通りの著作となっている。が、しかし、今回のご著書が「卒業論文」にはならないことを私たちは知っている。おそらく先生は今後もますます独自の視点で新たなテーマに取り組まれ、その成果を発表され続けるに違いないからである。